

オーストラリア便り 2 蛇 ヘビ ヘビ ~>°)~~~~

G'day from Down Under #2
Snakes, Pythons and Boas ㇿ

ウォーターズ 雅代
WATERS Masayo

Abstract: Generally speaking and for their own protection Australians have ample information about snakes. Of the top ten deadliest snakes in the world, Australia has the top nine. Because of the increasing human population and expanding towns, snakes are one of the many creatures that humans have forced away from their natural habitat, the bush. Now many new towns are surrounded by bush, the place where the snakes live. Seeing wild life in the town made me realize that we are invading their bush in the name of civilization, in order for us to live comfortably in this huge Land Down Under. As there are many kinds of venomous snakes in Australia, people need to know which ones are the poisonous ones and which are not. The chances are very likely that you will happen to encounter a snake at some time. Snakes can be hiding anywhere in your backyard or even living in the ceiling of your house. In our late twenties, my husband and I had a pet python named Hebi chan. The photo of me carrying the python on my shoulders was sent to my shocked mother in Japan. I loved our python and I was not afraid of snakes, or so I thought. Now I am living in a residential area that is located in a place that used to be bush not so long ago. As I have learnt more about snakes my idea has changed and now I am afraid of them because of the many poisonous ones. It is also worrying that I may not be able to clearly tell the difference from one kind of snake to another. This is a fear that I now have. Some people think it is lucky, to run over a venomous snake by accident. Whereas other people are very happy to stop the traffic in order to let a 2 meter long non venomous python cross the road in safety. My idea of snakes has changed, however I still love their beauty.

Key words: python, boa, venomous snakes

ダイヤモンドパイソン ブラックスネーク 変温動物 冬眠
アオジタトカゲ サン・テグジュペリ

蛇と私

日常生活の中で、人間の命に係わる大切な情報の一つとして、オーストラリア人は一般的に蛇について多くの知識を持っている。20代後半の頃、シドニーから北へ車で1時間15分程度の距離にある、テリガル¹というやはり海辺の町で半年ほど暮らしたことがある。そのころ私と夫は、2メートル前後のダイヤモンドパイソンをペットにしていた。夫は子供の頃から爬虫類が大好きでそれに関する知識も豊富だ。へびちゃんと名付け時々ケージの外に出して、肩に乗せたりするのも怖いと思ったことはなかった。さらさらとしてヒンヤリして、どっしりと重いへびちゃんを、夫に手伝ってもらいながら両肩に乗せて、とても嬉しそうな顔をした私の写真を、日本の母に送った。後に母から聞いたことだが、その写真を見た時は、相当なショックを受けて、一体この娘はオーストラリアで何をしているのだろうと、悲しくなったそうだ。その後、私達はシドニーで仕事を探すために引っ越し事になった。シドニーの夫の叔母の家で数か月居候の予定だった。へびちゃんを連れていく事は、絶対に許されなかった。しかたなく知人に託したが、数日後その家から逃げてしまったと聞いた。私達は、とても落胆した。



その頃の私は、蛇を怖いものとは思っていなかった。ところが今回のオーストラリア長期滞在では、生まれて初めて、実は蛇は恐ろしい、と思うようになった。

NSW 州のミッドノースコーストの田舎町²に住み、毒蛇の知識を多少得たら、蛇には遭遇したくないと思うようになった。この場所は、ブッシュに隣接した住宅地であるためだろうが、とにかく蛇によく出会う。車から降りた瞬間、近くの植え込みへ逃げていく蛇の尻尾を見たり、洗濯物を干しに庭へでたら、足元からいきなり何か長いものが動いていたりとか、数えきれない。私はそのたびに、へビーっと言ってその場から逃げている。そのたびに、いかに私には注意力というものが欠如しているのか、と再認識する。大きさ、長さ、色やら模様やら、夫や息子たちに詳細をきかれても答えられないのである。何センチと聞かれても、頭から尻尾まで全部の姿を確認する前に、蛇は私から、私は蛇から逃げ出すのだから、その手の質問にはまず答えられない。せいぜい、黒っぽかったとか模様は分らないとか、太さも分らないとか、その程度の、わからないという情報しかない。しかし夫もその弟も妹も両親も、その場に居合わせた者たちは、私の曖昧さに苛立ちを見せながらも、さらに細かいことを聞いてくる。艶はあったか、つや消し状態か、どこから出てきてどこへ行ったのか？もちろん答えられない。私は蛇がこんなにいる国で育ってなかったから、などと言い訳を言っではお茶を濁している自分に、腹が立つ。

ラッキーな隣人と不運な毒蛇

隣の女性が、塀越しにあれこれ話しかけてくれる。ある春の晴れた日、この日の話題は蛇である。この辺にはブラックスネーク³がでるから、気を付けるように。先日、夜遅く帰宅した時に家の前にいたのを、知らずに轢き殺していた。朝出かける時にドライブウェイに潰れた蛇をみて、非常に驚いた。前夜帰宅時に、知らずに轢き殺したのは明らかだった。噛まれていたら猛毒だから大変な事になるところだった。轢き殺してラッキーだったと言っていた。うっかり足で踏みつけていたら、たとえ寒くて動けなくしている蛇でも、渾身の力を振り絞って、自らの身を守るために、噛みついてくるだろう。そうなっては本当に大変だ。うっかり踏んでいたら命に係わる、大変な事になるところであった、と、彼女は胸をなでおろした。

ブラックスネークというのよ。おなかが赤い黒い蛇よ。でもおなかが赤くない黒いのも毒蛇なんだから気を付けてよ。と繰り返し私に教えてくれた。こういう情報はあつという間に近所に伝わり共有される。どの通りでブラックスネークがでたとか、どの家の庭からどのくらいのサイズのパイソンが出てきてどっちへ向かって移動していったとか、ガーデニングや洗車などの戸外作業の時や散歩の途中、それに、スーパーマーケットや商店街でちょっと立ち話という時に話題になる。もちろん、職場や学校でも話題になる。

これは春先のことで、冬眠から覚めた爬虫類が餌を求めて移動中、日の当たる隣家の温かいコンクリートで気持ち良く、とろとろまどろんでしまい、そのうちに日が落ちてしまったのか、あるいは、移動を続けるには十分な体温を維持するほど気温が高くないのに冬眠から覚めてしまったのか。体温をある程度外気温に支配されるという変温動物の蛇が、これではいけない。隣家の女性から聞いた蛇の事を、私は暫く考えた。1メートル以上の長さであったという。そこまで育つのに、一体どの程度の日数というか、物理的な時間が必要であったのか、私には皆目わからない。が、もしかしたら結構な年数を生きてきた蛇だったのであろうか。外気の温度が下がれば体温も下がり、思うように行動しにくくなるであろうに。突然の天候悪化でもあったのか、気が付いたら時すでに遅く、叢や植え込みへの安全確保のための移動をするには、気温が下がりすぎていたのだろう。そのまま動けなくなって、朝を待っていたのか。

ハッピーな男性とラッキーなパイソン

ブラックスネークを知らないうちに轢き殺していてラッキー、という隣家の人の話を聞いた数日後の、ある晴れた日の事である。町と住宅地を結ぶ唯一の道路であるハイランドパークロードの中ほど近くへさしかかった時、進行方向前方の反対車線に車が数台止まっているのが見えた。サイクリング用のカラフルなウェアにヘルメット、サングラスの姿勢の良い男性が、道路を塞ぐように、自転車を道の真ん中に置き、それを片手で抑えて立ち、もう一方の手を高く上げて車の走行を止めていた。鮮やかな黄色と青のサイクリング用のウェアを着て、切れ込みのたくさん入ったデザインのアーモンド形のヘルメットをかぶっている。雲一つない青空の下、太陽は、ほぼ、私たちの頭の真上に位置しようとしていた。自転車にも男性にも、ほとんど影ができていない。目がくらむ強い眩しさに、私たちも対向車線に停車中のステーションワゴンの運転席の女性も、皆がサングラスをかけている。ここではサングラスはファッションという以前に必需品である、それがなくては洗濯物も干しに出られない。曇りや雨の日以外の日中は、歩いていようが車の中であろうが、すれ違う老若男女が、ほぼ全員サングラスをかけているのが常である。当然の事ながら、サングラスをすると、目の表情が見えない。フレンドリーなこの町の人達は、そこで、すれ違う時に思い切り素敵なお微笑みをしてくれる事が多い。口元をに一つと、口角をぐっとあげて、歯が見えることも見えないこともあるが、この素晴らしい笑顔は、マナーとしての笑顔である。ほらね、私は怪しいものではありませんよ。と、笑顔でアピールしている。

この男性の笑顔もわかりやすかった。遠目にも、日に焼けた顔に白い歯列がはっきりと見える。満面の笑みを浮かべたこの男性が、なぜこの時速 90 キロ制限の道路で車の流れを止めていたか。その理由は、すぐに分かった。大きな蛇が、道路にいた。晴れた日のアスファルトの上で、日向ぼっこをしていたのか、横断しようとしていたのかは、わからない。

男性は実に嬉しそうだった。蛇が危険な道から安全な森へと移動するまで車道で蛇を守っていたのだ。その蛇は、薄黄色の肌に、暗い緑と黒の線が網目状に入った編み込みセーターのような模様の、ダイヤモンドパイソン⁴だ。私達が昔ペットにしていたへびちゃんと、同じ種類のパイソンであった。あの時には無知で蛇を恐れなかった私だが、今は、ちょっと怖い。パイソンには毒がないとわかっているけど、2メートル以上に立派に成長した姿だと、やはり迫力満点である。

“Beautiful, isn’t she?” と、男性は第一音節に通常の3倍ほどの長いストレッチをつけて、運転席の夫に話かけてきた。子供時代から爬虫類が大好きな夫にもこやかに、この男性と蛇の事をあれこれ話している。なぜ蛇には、一見して雌雄の区別もつかないだろうに、人称を女性にすることが多いのかな、と言う様な事を、私は何となく考えていた。でも同じ爬虫類でも、なんとかいうトカゲを見た時には he なのに、アオジタトカゲ⁵が庭に住んでるとわかった時は she、椰子の木からカエルが降ってきたときは、なんの疑問も持たず he って。この、人称代名詞の男性か女性かって、どうやって区別してるのかな？そういえばカンガルーが出た時は、he って言ってたような、ワライカワセミがベランダに来たときも he だった。そのうえ、夫の母は、洗濯機や冷蔵庫などの家電製品にも女性の人称代名詞を使うし、まったく。なんで？などと思いつつ、私は車の助手席から、文字通り道を蛇行しているその大きな美しい蛇を見ていた。蛇はほんの数分で、アスファルトから森へ入っていった。Beautiful とその男性はもう一度言うと、さらに満足げな満面の笑顔を見せた。“Thank you” とまた片手を高々と上げると、自転車を道路わきに道と並行に寄せた。たいした交通量もない田舎道での出来事であった。両車線合わせてもほんの数台停車していた車は、すぐに順番に動き出した。パイソンは毒蛇ではないので、このように車に轢かれないようにと、体をはって助けてくれる人まで現れる。こんな美しい蛇が車に轢き殺されるのを、助けないわけにいかないだろうと、サイクリングの男性は、満足気に見えた。私はこの人の行動を好ましいと思った。この道路の同じ場所付近では、この時以外にも横断する蛇やゴアナ⁶をよく見かけた。どうやら道路を挟んで反対側のブッシュに池か何かがあり、生き物が水を求めて横断するらしい。また道路を渡って巣穴に戻るのであろうか。池があるというブッシュから反対側へ渡っていくトカゲ等も見かける。水を飲んだら帰るのであろうか。

天井裏のパイソン

蛇は、ブッシュにも民家の天井裏などにも住みつく。時に、脱皮した抜け殻が風に吹かれて飛んできたり、ぼろぼろのレースか何かのような抜け殻が、木の枝に幾重にも巻き付いたようになっているのを見たりもする。私たちが住んでいる家の天井裏にも、一時期立派なダイヤモンドパイソンが住んでいるようだった。蛇がバルコニーの柱に絡みついて

日向ぼっこしていたのを、ある日息子が携帯のカメラで撮った。2メートル以上はあったそうだ。そして次の日、またもや蛇が同じバルコニーの柱に絡みついていたのを見かけた彼は、また写真を撮った。2枚の画像を見せてもらおうと、あれれ、バルコニーの柱の長さを基準にして考えると、どうやら大きさは似たような感じだが、雰囲気はかなり違うではないか。ほほう、2匹はいるわけね。と、確認できたものだけで、当時2匹住みついていた。

住宅地の裏手はすぐにブッシュである。そこに住む色々な生き物と宅地との境界線までの距離は、15メートルもない。境界線と言っても森林火災の際に住宅への飛び火を防ぐために、宅地からある程度の距離にある樹木を、当局が伐採してできた程度の、ごく曖昧な、樹木伐採後の帯状の地帯が境界線のようなものである。寒くなる前に偶然見つけたのかもしれない外壁の穴が裂け目から、ブッシュに比べれば天国のように乾いていて暖かく、安全で、しかも生きたネズミという特典付きの屋根裏で、おなか一杯になって冬眠して目覚めたのだろうか。ネズミの音は、そういえば久しく聞いていなかった。パイソンの命を繋いでいくために、絶滅したかもしれない。天井裏の蛇が、そのまま住み着いているのか、もともとの住処の森へ帰って行ったのか本当のところはわからない。夫は、冬が終われば、天井裏よりもブッシュのほうが、食料が豊富で日光にも当たる機会が多く快適なのだから、森に帰っていくという。

ダイヤモンドパイソンは、黄味がかった地肌にすぐにそれとわかる特徴的な茶か黒の模様が頭から尻尾まで続いている。だがよく見ると、十匹十色。個体の識別ができる程度の違いがある。色の強さなどもそれぞれどこかが違っていても、どの蛇も確かに美しい。毒蛇のブラックスネークも、パイソンの華やかさは無いが、美しさという点では変わらない。どの種類の蛇も、それぞれが美しい。爬虫類には、爬虫類特有の美しさというものがある。ハイランドパークロードができるずっと以前から、ここはブッシュの一部であった。いろいろな動植物の生態系が、すでに存在していた。そこに棲んでいた多様な種類の生き物の子孫が、今も私達の目の前のブッシュに棲み続けているのだ。冬の終わりから春先の暖かい日、冬眠から目覚めた蛇やトカゲが道路へ出てきては、車に轢かれて悲惨な結果になる。これは1年のどの時期よりも、明らかに、非常に多いと容易く気が付く。ブッシュを切り開いて造ったこのあたりの道路や住宅地のいたるところで、変わり果てたその姿を嫌でも目にする。その場面に遭遇すると、やはり意気消沈する。毒蛇もパイソンも、人懐っこいアオジタトカゲや名も知らないトカゲ等も、種類や大きさに関係なく、そういう姿になっているのを見るのは本当に辛い。

丸呑みの誤解の謎

今回のエッセイを書きながら、蛇が嫌いな人にはトラウマになるような、蛇に関する色々な質問を夫に投げかけた。何度も似たようなことを聞いてばかりで悪いな、とは思いつつ、いくつもの疑問を夫に投げかけながら気がついた。私はあのサン＝テグジュペリの物語の冒頭の挿絵を最初に見た時から、蛇の生態についてずっと勘違いをしてきたということが分かった。この勘違いは一朝一夕にできたものではなく、恥ずかしいことに、子供の頃の理解度で固定された記憶だ。それを、まあなんと長い間そのままにしてきたことか。記憶の層があるとして、その深いところにあったものだが、何度か思い出すことがあっても、間違った知識として、そのまま更新してきた記憶であった。単なる思い違いであるが、なぜかあっさりその記憶の上書きができなかった。故に夫には鬱陶しい思いをさせたかも知れないが、グーグルで検索すれば済むものを試みもせず、あれこれと質問を続けたのではないだろうか、と私は考えた。毒のある蛇は、毒を使い餌となる生き物を麻痺させて殺して食べるそうだが、パイソンやボアという毒なしの蛇は、ググッと獲物に巻きついて絞めて、動かなくなった獲物を食すると思っていた。それまで私は、蛇は獲物を丸呑みに、生きたまま丸呑みにするものだと思い込んでいた。子供の頃何度か読んだ、サン＝テグジュペリ⁷の『星の王子さま』の冒頭で見た、ウワバミにぐるぐる巻きつかれて目を見開いている動物の挿絵の記憶がある。私の問題は、蛇が獲物を丸呑みにするというのは、生きたまま、しかも意識のあるままのものを嚥下する事だと、ずっと勘違いしたままこの年になってしまっていた事であった。サン＝テグジュペリが悪いのではない。動かない状態で口に入れたとしても、気が付けば口の中で必死にもがくだろうから口の中はひっかき傷だらけになり、痛いだろう、そんな無意味に怪我をするような行為を蛇がすると思うのか。という、夫の非常に最もな説明を最終的に引き出すまで、私は何度も、呆れ顔の夫に色々と尋ねた。丸呑みってそのままって事で、恐怖で気絶しているうちに丸呑みされるんでしょ？蛇の体内に入ったら恐ろしさで失神して酸欠で、でしょう？だってあなた、冷たくなった動物を、普通の蛇は食物だと思わないから手を付けない、って言ってなかった？ペットショップや動物園や研究機関等で生まれ育てられ、それが食べ物だって教育された蛇しか、そんなものは食べないって言ってたじゃない？という質問を色々としていた。冷たくなったものは食べないと言われてはいるが、どうなのだろう。

白魚

またしても、私の浅はかな思い込みが固定化したままになっていた記憶の、書き換え時期であった。さっきまで生きて動いていた獲物を、完全にもう動けなくしてから、まだ温かいうちに、蛇は食す、と、いう事でしょ、と。そう言いながら、別の古い記憶がひょいと顔を出した。幼い頃、父に白魚の踊り食いに連れて行かれた。桶に入って泳いでいるのを、どうやって捌ったのかは覚えていないが、何匹か自分で捕まえ、酢醤油と一緒に生き

ている白魚を、言われるままに、口に入れた。口の中で動く小さいけれどもパワフルな生き物を、咀嚼する事もそのまま嚥下することもできず、しばらく口に入れて泣きたくなりながら、器の酢醬油に吐き出した嫌な記憶がある。踊り食い、あれが最初で最後。なるほどね、蛇だってそうよね。と、私は自分の長年の勘違いへの馬鹿げたこだわりを、ようやく、納得とともに上書きする機会を得た。

¹ Terrigal 挿入写真の背景は、テリガルの海が見える高台の家の庭でヘビちゃんを肩に乗せた「私」。

² Nambucca heads http://en.wikipedia.org/wiki/Nambucca_Heads,_New_South_Wales 参照

³ オーストラリアのもっとも危険な毒蛇 10 選中第 10 位。10 位でも噛まれたら命に係わる。
http://www.australiangeographic.com.au/topics/science-environment/2012/07/gallery-10-most-dangerous-snakes-in-australia/10-most-dangerous-snakes-in-australia_image10/ 参照

⁴ diamond python で検索し images for diamond python を選ぶと、実に個体差のある模様や色がわかる多くの画像を見る事ができる。蛇がお好きでない方にはおすすりめできない。

⁵ 舌が青いのでアオジタトカゲ (blue tongue lizard) 危機に瀕すると大きく口を開けて、紫がかった平たい舌を見せ威嚇。性格は大人しく、優しい目をしたトカゲで、他の色々な生き物同様、民家の庭や道路の端から出没。穴を掘って住処にしたり、外に放置されたパイプなどにも住み着く。バナナやひき肉を置いておくと巣から出てきて食べてくれる。下記は顔のアップがみられる動物園のサイト。

<http://www.australiazoo.com.au/our-animals/reptiles/lizards/blue-tongue-lizard>

⁶ goanna 成長すると 3 メートル近くになる大型のトカゲで、初めて道路を横切る姿を見た時は猛スピードで走るワニが出たと思った。肉食で蛇も捕食される。

<http://en.wikipedia.org/wiki/Goanna> 参照

⁷ アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリ (Antoine de Saint-Exupéry) フランスの作家、操縦士。1900 年リオンに生まれ 1944 年 7 月、飛行中に消息を絶つ。

『星の王子様は』遺作として 1946 年にパリのガリマール社から発行されたもので作中の挿絵は作者による。(昭和 28 年 3 月 15 日第 1 刷発行、昭和 41 年 7 月 7 日大 21 刷改訂版発行 岩波少年文庫 53 あとがき参照)

参考図書

岩波少年文庫 53 『星の王子さまープチ・プリンス』

サン＝テグジュペリ作 内藤 濯 訳

昭和 46 年 7 月 30 日 第 33 刷発行 岩波書店

(Received: August 2014)